

火星

平成二十五年一月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

始まりの終りのなくて蓮枯るる

セーターを着て袖口を大切に

伊吹嶺へ返しむらさき立ちし鴨

もがり笛空也が口のかなでたる

朝の池うごかしてゐし鳩一羽

白足袋が木賊のあはひ来るところ

赤松を風のめぐれる治部煮椀

コカコーラの車入りゆく枯木山

小さくて賢さうなる歯朶飾る

越年や眼鏡ことんと卓に置き

推薦のごとば

第十六回 火星賞

坂口 夫佐子

平成二十四年度の火星賞を右の通り決定致しました。

平成二十五年一月

火星俳句会主宰

山尾玉藻

石に樹に古りし貌あり秋の屋
燕去にわだちの泥の翡翠いろ
舞ひおりて寒さたたみし鶴
暗き眼の水に映る桜鯛

作句の上で客観写生は基本的姿勢であり、なかなか辛抱の要る手法である。その地道な作業に励んだ結果、「古りし貌」「翡翠いろ」「寒さたたみし」「暗き眼」の映像の復元力、伝達力で、作者のこころの写生へと繋がっている。こころはものに託すべし、を正しく実践する。その上、

天心の月へ跳びけり猫の胴
八朔のサイフオン点す睡かな
祭壇に燐寸のすられ冷まじき

など、「猫の胴」「睡」「燐寸」のものに自己の感覚を巧みに透かし、濾す力もある。

鼻あげて口の三角春の象
南天の花屑まみれ大蚯蚓
帰省子のひたすら眠る蹠かな

時折見せる微笑ましいウイットに富む句柄も見逃せない。中で、「春の象」の単純さ、大らかさは印象的である。

この作家は初学の頃から悩み、苦しみ、しかし諦めないで今日まで努力を重ねて来られた。「火星」編集長として責める多忙な日々を送られる現在も、その緊張の糸を緩められることはない。しかも、

ずぶ濡れの母と出くはすいなつるび

から察せられるように大きな事情も抱えられる中での作句であり、本受賞は得られるべくして得られたものと言える。

坂口夫佐子さんの火星賞受賞に対しこころからお祝いを申し上げます。

太白星

杉浦典子

種採つて子のてのひらの丸さかな
河馬の池干上がつてをり花芒
母の忌の梨畑に梨ぬくもつて
舟引いて舟帰りくる夕月夜
山芋のにほひつめたしおろし金
ほろほろとむかごこぼるるむかごかな
秋の雷話のはじめ聞きおとす

浜口高子

毬栗を踏んで木洩れ日歪みたり
くろぐると山が夜に入る秋螢
妓王寺の暈のほつれ秋の昼
妓王妓女の露けき厨子へ膝繰りて
火の山の水を先づほめ走り蕎麦
頬杖の酔のほのかや鉦叩
蛇の皮枝に垂れゐて月を恋ふ

火星作品 山尾玉藻選

安心の日数を太る蓮の実 大和郡山城 孝子

けふ鬱の蓑虫の糸長かりし

月の鳩になりたく鳩の潜きけり

鹿の糞まろぶ石段十三夜 八幡坂口夫佐子

うろこ雲うろこ乱れず流れけり

新米の袋に小さきのぞき窓

三方に行者日誌や笹子鳴く

冷まじや垢離場に垂るる白タオル

子にゆづる念珠拭へり十三夜

眠き子に胸まさぐらる椿の実 宝塚河崎尚子

集まれば焚火始まる父の家

熾に水かけて父の家鎖しにけり

杉空を時雨走りし氷室越
野分晴蝶の骸の月のいろ
どぶろくを伏せきし兄のはにかめる
栗田口月見仕度の出入りなる
傘二本股挟みせし月見酒
角伐や伐りたる角は掲げ見せ
桃吹くや母の常着は忘じたる
演習のジープを吐ける野分雲
虫の夜のひとりを余し齒をみがく
仏壇の閉めある四角紅葉冷
草の実の飛ぶや松明組むたびに
金風の鞍馬に並ぶ括り柴
木犀の二階にミシンひらきけり
虫の夜の畳に沈む鉄垂鈴
道ばたの晴れきつてゐる小鳥かな
またひとつ朴散る音の日向かな
八幡さまへ水をもらひに秋収

神戸深澤 鱻

宝塚山田美恵子

蘭定かず子

選のあとに

山尾 玉藻

安心の 日数を 太る 蓮の 実 城 孝子

安心は「あんじん」と読みたい。華やかな蓮の花の時節と異なり、実を結ぶ頃ともなると大方の人が興味を示さなくなる。しかし我々俳人にとつては蓮の実の方が実に興味深い。人目に曝されることもなく静かに実を結ぶこの頃、蓮にとつて本当の意味で安らかな境地となれるのだろう。だが、実が跳び枯を兆す日もさほど遠いことではないだろう。「安心の日数」の措辞に作者の蓮に対する慈愛のところが籠る。同時発表作「へ月の鳩になりたく鳩の潜きけり」、鳩の姿は作者自身の俳のこころそのものである。

子にゆづる念珠拭へり十三夜 坂口夫佐子

恐らくこの念珠は作者が母上から譲り受けられたもので、今度はそれをお嬢さまに譲る気持ちになられたのだろう。念珠を念入りに拭う姿から、母から自分が受け継いだように、我が子へ託す祈りのような思いを噛みしめる作者なのだろう。「十三夜」の澄みきつた月明りがその思いをいよいよ清澄なものとする。「新米の袋に小さきぞき窓」、中のお米を確認できるように、米袋にごく小さな透明の開口部があるの

だろう。「のぞき窓」とは思わず口をついて出た表現なのだろう。艶やかにびっしりと詰まるお米にこころ躍らせる作者が想像される。

眠き子に胸まさぐらる椿の実 河崎 尚子

乳飲み子は勿論のこと、少し大きくなった幼な子も眠気が来てぐずると、直ぐに母の乳房を恋しがらる。掲句、ぐずり始めたお孫さんを抱きあげた作者も、その小さな手で胸をまさぐられたのだろう。思いがけないことだっただけに作者は少々驚き戸惑つたに違いない。暗い紅色となつてぱっくりと避ける「椿の実」が、そのような複雑な心中を示唆している。

どぶろくを伏せきし兄のはにかめる 深澤 鱻

句会でこの句に出会った時、私は「伏せる」を盃を伏せると解し、どぶろくを飲み干した兄上が少し恥ずかしそうにされた様子を想像した。しかし本来「伏せる」とは隠す、潜ませるの意であり、掲句の「伏せきし兄」もどぶろくを人目につかぬように仕舞い込んで来られた兄上と捉える方が正しいだろう。最近では個人がどぶろくを醸造するのは違法ではないが、兄上はつい昔からの習いで奥まった暗がりや床下に隠されるのだろう。そう解する方が律儀で昔風の兄上のお人柄を彷彿とし、「はにかめる」の動作も一層微笑ましく感じられる。(以下略)

恒星圈

藤原冬人

隣り家の表札変はり秋深し
秋高し雲を舟行く最上川
行き暮れて登米の居酒屋あかり
鏡花忌や木橋のすそを傘通り
石巻魚町通り萩あかり

廣畑 忠明

堀 志 皋

スタンドの灯影小さく夜の長し
鳥渡る東寺の塔に日の残り
火祭の鞍馬の里灯川沿ひに
派手に干す夜具の赤きを鷓猛る
この道は黄泉へ続くや秋の風

運動会神戸の海に水上機
奈良町に仏芒の色いろいろ
道の駅焙り過ぎなる秋刀魚鮪
一袋詰め放題の酸橘かな
竹島が父の生国鳥渡る

深 澤 鱻

松 井 倫 子

年寄に猫のぎやうさん諸の島
島そとに出たことあるか萩の猫
素通りの旦過市場や秋湯
新豆腐旦過市場に生々と
甘藷粥や髭根残るも越後ぶり

秋うららばつくりとあく靴の底
堀の上を鮰一氣に月明り
金亀子の翅食みのこし秋の蜂
月代やタイ舞踊めく松の枝
崩れ築雲のあはひの空ふかし

獅子座

山尾玉藻推薦

藤田素子

秋草に囲まれてみてひとりなる
ハロウインのかぼちやの笑ふ雨催
反り橋を渡るカップル雁のころ
水澄むやバツクパツカー荷を下ろし

井上淳子

灯の入りし船に声する無月かな
凭れ合ふ草花を活け十三夜
うんちくの落語に及ぶ初秋刀魚
棲みついて烏鶺つぶやく月の杜

涼野海音

草田男忌鐵路の先に雲のなく
クツキンググペーパーの白小鳥来る
なだらかな丘に日の差す松手入
身に入むや色変はらざる地図の山

田中文治

菊脛僧の話にむせにけり
妻が水厨につかふ野分あと
夕霧の鳥居に凭せ人力車
水音のほか暮れぬたる石叩

西村節子

月光を踏みゆきにけり僧の列
行く程に道の狭まる花野かな
十三夜紙に文鎮滑らす
萱原の道途切れぬし昼の月

根本ひろ子

酒樽に小さな蛇口小鳥来る
ブルドーザーの影の近づく大花野
婚礼の荷のほどかる稲架襖
馬小屋の跡かたも無し蓼の花

藤本千鶴子

夜の納屋に入る新藁とトラクタ
月白の川に迫り出すカフエテラス
毒茸の谿に無くせしポーチかな
鳥小屋に時計の掛かる秋の昼